

平成19年1月26日

都城市長 長峯 誠 様

社団法人 日本建築学会
九州支部長 竹下 輝和

都城市民会館の保存に関する要望書

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。日頃、本会の活動につきましては、多大なご協力を賜わり、心より感謝いたしております。

さて、都城市におかれましては、このほど都城市八幡町にごございます都城市民会館の取り壊しを検討されている由、伺いました。

すでにご存知かと思いますが、別紙にありますように、この建築作品は、日本を代表する建築家で世界の建築界に多大の影響を与えた菊竹清訓氏が、その独自のメタボリズム理論を端的に具現化した建築であり、菊竹氏の作品の中でも特に独創的な形態をしているものです。そして都城市において非常に特徴のある景観を形成し、市の建築文化の象徴的存在となっております。この建物をめぐっては、保存活用するための市民運動も起こっている由、お聞きしております。

日本建築学会としましても、このような貴重な建築遺産が失われてしまうことは、非常に残念なことであります。この建築の文化的また歴史的価値を後世に伝えるため、今回の御市の事業につきましては、どうか改修して別の用途で利活用するなど、何らかの形での保存を考慮されるべく格別のご配慮を賜わりますようお願い申し上げます。

なお、本会はこの建築の保存に関しましては、出来ます範囲でお手伝いさせていただきたいと考えておりますことを申し添えます。

今後とも、優れた歴史的建造物の保存のために、ご理解とご協力を賜わりますようお願い申し上げます。

敬具

都城市民会館に関する見解

日本建築学会九州支部 歴史意匠委員会
伊藤 重剛

都城市民会館は、市制 40 周年を記念して建設され、1966 年の 4 月に開館し、40 年間、都城市の芸術文化活動の拠点施設として機能してきた。2006 年 10 月に都城市総合文化ホールの開館に伴い、都城市民会館の芸術文化活動の拠点施設という機能が終焉したとされ、現在、その存在の意義が問われている。

都城市民会館は建築家・菊竹清訓の設計による「メタボリズム」理論を具現化した建築として、日本国内を初めとして広く海外にまで知られている建築である。「メタボリズム」とは、生物学上の言語で「代謝」を意味し、建築におけるメタボリズム理論とは、都市や建築を生物と同じく代謝を繰り返すものとして捉え、代謝のサイクルに応じて都市や建築を設計しようとするものである。

1960 年に日本で開催された世界デザイン会議を契機として、当時の若い建築家たちが、世界に向けてより普遍的で一般的な建築理論を発信しようとして、このメタボリズムという理論が発生し、菊竹清訓はこれを実体化する中心的な建築家として活躍した。1966 年に竣工した都城市民会館は、メタボリズム理論から導き出された菊竹清訓の設計手法が徹して具現化された建築である。

都城市民会館では、代謝のサイクルの長い「空間装置」とサイクルの短い「生活装置」とにグルーピングし、鉄筋コンクリート造のホールや事務室、オーディトリウムの床部分を「空間装置」として、鉄骨構造により覆われた部分を「生活装置」として実体化している。屋根を構成する門型の柱梁は、鉄筋コンクリート部分の側面の一点から放射状に配され、オーディトリウムの屋根を形作ると同時に、「生活装置」が「空間装置」に緊密に結合していることを視覚的に示すものとなっており、結果、極めて独創的な形態の建築となっている。

都城市民会館は、メタボリズム理論を端的に具現化した建築ということだけでなく、菊竹清訓の作品の中でも特に独創的な形態をしている。これは、菊竹清訓の「かたち」に対する飽くなき追求の結果であり、その存在感は他に類を見ないほど強烈なものとなっている。その「かたち」は、国道 10 号線を鹿児島方面から都城に向かう景色の中で圧倒的な印象を示す。また、街並みの隙間から垣間見える都城市民会館の屋根の印象も強烈である。このような大胆で異様な建築形態は、1960 年代の日本が高度成長期にあり、建築家の実験的な試みに寛容であった時代を反映している。

都城市民会館は、高校生が建設の一部に関わったり、コスト節減のため施工管理を市職員が行ったり、当時の一地方都市における文化施設の成り立ちを示すものである。不幸なことに「雨漏りがする」とか「音響が悪い」とかの批判を浴び続ける一方で、多くの人々から賞賛もされている。都城市民会館は、竣工当時から現在に至るまで、40 年という長きにわたって「建築とは何か」、「文化施設とは何か」を、都城市民に問い続けてる建築であり、都城における建築文化を象徴する存在となっていると考えられる。

1) 都城市民会館は日本を代表する建築家・菊竹清訓の設計した建築であり、2) 「メタボリズム」理論を端的に具現化し、3) その独創的なかたちは高度成長期の日本の状況を反映したものとなっている。4) また、その建築としての存在感は他に類を見ないほど強烈なものであり、5) 都城における建築文化の象徴的存在となっていると考えられる。以上の理由から、都城市民会館は建築的価値を今でも有しており、今後もこの建築の保存活用が望まれると判断する。